

研究代表者 所属・職：社会福祉学部・准教授

氏 名：中村 強士

研究課題名：家庭訪問型子育て支援「ホームスタート」の効果に関する実証的研究

研究の概要

本研究は、愛知県のモデル事業を実施する「ホームスタート・スマイリーたけとよ」の取組に参画し、ビジターへのインタビュー調査を中心に、本事業を実施する団体や関係団体への調査も関わらせながら、ホームスタート（以下、HS）の効果や課題を考察するものである。

なお、インタビュー調査は、フィールド実践演習（2年中村ゼミ）の所属学生（18名）が実施した。

達成状況・成果内容

- 効果測定のポイントは、①オーガナイザーは支援の質を担保しているか、②利用者への支援効果は多面的に表れているか、③拠点型のニーズを満たせない人に支援を届けているか、の3点である（ホームスタート・ジャパン編（2011）『家庭訪問型子育て支援「ホームスタート」実践ガイド』明石書店）。
- 当初予定していた、ビジターへの訪問前インタビューについてはすべてのビジターに実施することができた。しかし、ビジターへの訪問後インタビュー調査は1件に留まり、①ビジターに同行し利用者家庭を訪問（可能であれば利用者へのインタビュー調査）、②第2期ビジターへの訪問前インタビュー調査、③第2期ビジターに同行し利用者家庭に訪問、④第2期ビジターへの訪問後インタビュー調査、⑤ビジター養成講座への学生の参加の5点については実施できなかった。
- 関係者へのインタビュー調査は、①オーガナイザー（スマイリーたけとよ）、②武豊町子育て支援課（担当課）、③岡崎市におけるモデル事業実施主体（HS おかざき）※オーガナイザー、④豊

橋市における事業実施主体（HS まんま）※オーガナイザー、⑤愛知県健康福祉部子育て支援課（担当課）の5団体を予定した。さらに、学生との議論をふまえて、⑥スマイリーたけとよの利用者、⑦HS 未利用者およびHS 非利用者（すでに子どもが就学している）※どちらも武豊町内のママサークルから抽出、⑧HS おかざきのビジター（訪問済）、⑨HS おかざきの利用者の4（5）団体を追加し、全部で9（10）団体に実施した。

- スマイリーたけとよのビジター14名のインタビュー調査から得られたHSの効果は、①動機によらず実施意欲が継続されている、②「傾聴」という学びに意義を感じ、自身の性格や子育て経験を省察、③オーガナイザーへの強い信頼、④「利用者に近い」という強みの4点が考えられる。課題としては①ホームスタートの理解が不十分なこと、②「利用者に近い」ことが裏目に出る危険性の2点があると考えられる。
- 訪問後のインタビューを受けたビジター（1名）は、ベビーシッター経験があり、赤ちゃん大好きで子育ての大変さと話すだけで楽になる自身の経験をもっていた。訪問前のインタビューでは、①困りごとがなくても利用してほしいという気持ち、②利用者を入先観でみない（家族構成のみ）というこだわり、③気持ちが変わってくれたらうれしいという期待がみられた。訪問後のインタビューでは、①母親像を早々に取得し、子育て経験を踏まえた助言が行われた、②当初上の子に「緊張」していたが関わりのなかで上の子に良い変化をもたらした、③上の子への母親の見方を変容させ、母親に喜び・安心・学びを獲得させた、④ビジターは訪問のたびに信頼関係がつくられ太くなることを実感された、⑤訪問経験はビジターの継続意欲だけでなく、

他のボランティア活動にも波及する意義をもたらした、以上6点から、訪問前の期待を原動力に、数回の訪問によって利用者（母親と上の子の双方）に支援効果をもたらしたと考えられる。

- 上記ビジター調査の支援効果は関係者調査でもみられた。例えば、①親だけでなく子どもにとっても有益（たけとよ利用者）、②母親の子育てと異なる考え方を学ぶ（おかざき利用者）である。他方、すでに「支援拠点」がある親はHSの必要性を感じていなかった（たけとよママサークル）。HSをさらに広めるために利用者側から得られた課題としては、①広報、②支援制度の1つにする、③出張窓口をつくる、④もともとのつながりを利用する、⑤「同じビジターが良い」というニーズに応える、の6点があると考ええる。
- 広報という課題は支援者側であるオーガナイザーや行政もあげていた。また、オーガナイザーは支援の質を担保するために、研修がビジターをよりよく知る重要な場として位置付けており、その上で、ビジターと利用者とのマッチングに重きを置いていた。また、オーガナイザーも行政も、数ある子育て支援策の重要な柱としてHSを考えており、お互いに行政とNPOがそれぞれの良さを発揮して進めることを高評価していた。さらに、愛知県はHSの担い手であるNPOが20年間の地域子育て支援活動およびHSそのものの仕組みの双方に信頼を寄せていることがわかった。HSを今後発展させるためには、①広報、②効果が検証しづらいこと、③地域子育て支援策における位置づけ・連携した運用、④運営費の諸課題があることがわかった。
- 本研究、すなわちビジター及び関係者へのインタビュー調査により、①オーガナイザーがビジターからの信頼を土台に彼らの質を見極めてマッチングすることにより支援の質を担保していると考えられる。②訪問後もインタビューできたビジターは1名にとどまったものの、得られた調査結果からは、利用者への支援効果は多面的に

表れており、かつそれは関係者調査からも示唆することができる。③HSを実施したばかりではあるが、スマイリーたけとよ武豊町行政も拠点型のニーズを満たせない人に支援を届けたいという思いを超えて、HS利用を当たり前にした子育て生活を構想していた。限られた調査データではあるが今後詳細に分析することによって精緻化を進める（以下に詳述）。

今後の展望

- ホームビジター調査結果（逐語録）のテキストマイニング分析
訪問前のビジターへのインタビュー調査結果から、ビジターという担い手を増やすための課題を明らかにするために、さらなる分析を行う。
- 関係者調査結果の分析・構造化
関係者調査のうち、ビジター、利用者、オーガナイザーの3者は所属の異なるインタビューを実施している。相違点を発見し、HSを広めるための課題を探る。
- 行政への補足・追加調査
HSを継続発展させるためには行政との連携・協働が欠かせない。武豊町、岡崎市、豊橋市それぞれの担当課に補足あるいは追加調査を実施し、「拠点型のニーズを満たせない人に支援を届けているか」の問いを考察する。
- 研究成果の発表
本研究の成果を研究論文にし、本学『社会福祉論集』に投稿する。